

## 横塚先生の最終講義

—Memento Mori と Carpe Diem

## 富山典彦

さる1月15日、横塚祥隆先生の最終講義を聴いた。その講義はもちろんあの「ヨコツカです……」という、澄んで艶のある独特の語り口で始まる。先生は成城大学に40年間お勤めになったということだから、ぼくはそのうちの14年間だけ「同僚」だったということになる。

横塚先生との最初の出会いは、その14年間の少し前になる。関東平野のはずれ、秩父山地の麓にある大学でドイツ語を教えていたぼくが、縁あってヨーロッパ文化学科に来ることになった。わが家はもちろん、当時幼稚園児だった娘までが大喜びで、その日を今か今かと待ちかまえていた。教授会の投票でぼくの採用人事が承認されたあと、「割愛願」なる文書が成城大学からぼくの前任校に出されることになる。この1枚の紙切れでは失礼だといって、藤本淳雄先生と横塚先生が、はるばるお出ましくくださった。藤本先生とは独文学会の仕事などでご一緒させていただいていたが、横塚先生とは、このときが初めてだった。

それまで、藤本先生の口から「ヨコツカさん」という名前は何度も聞いていて、あるイメージができあがっていたのだが、第一印象は、その見事な白髪だった。若々しく快活な藤本先生とは好対照、失礼ながらぼくには、横塚先生のほうが年上であるように思えてならなかった。そのときの横塚先生

は、今のぼくとほぼ同年齢だったから、七十歳になられた今も五十代の頃の若さそのままとも言えないこともないが。

町田から、新宿・池袋を経由して、東武東上線の坂戸までの長い旅にお疲れのようにお見受けしたが、そこからさらにぼくの無謀な運転で、迷惑な「観光案内」などを聞きながらの半時間、あの『白い巨塔』の撮影にも使われた大学へと向かう。

学長室では、藤本先生が「大事な人材を譲り受けることになりまして、本当に申し訳ありませんが……」などと、ぼくにとっては過分のお世辞で口火を切ると、すかさず学長が「本当にそうなんです」と、妙に実感のこもった返答をなさる。入学式で新生生に間違えられてから14年、ようやく一人前の大学教師になりつつあったぼくは、そろそろ前任校にその恩返しをすべき時期にさしかかっていたのである。その恩返しも十分にしないままの転任を、学長は「本人のためですから」と快く認めてくださったが、この日、理事長室のドアは閉まったままだった。

長旅の疲れを癒す薬を処方してもらうために、帰りがけに寄ったのが、川越名物の鰻だった。藤本先生も横塚先生も大好物だったようで、酒がまわるにつれて、無口に見えていた横塚先生がおもむろに口を開く。第一印象とは違って、なかなか味のある、愉快的な人物だという「正体」が見えてくる。妻と娘も同席させてもらっていたが、杯を傾ける横塚先生の口からこぼれ出る蘊蓄を聞いているうちに、一日も早く成城に行きたいという思いが、文字通り鰻登りに高まってくる。娘が初等学校の「お受験」に成功したのも、何が何でも成城に行きたいという希望の灯を、横塚先生がこのとき、娘の心に点してくださったからだと思う。

この日から4月1日までの、宙ぶらりんだが妙に幸せな時間、四半世紀を

成城で過ごされた横塚先生から、一通の長い手紙を頂いた。饒舌ではないが、少々スパイスのきいた的確な現実認識は、冷徹であるとともにユーモアに溢れている。言わずもがなのことを言いながら、そこにこそ言い得ない真実が隠れている……そんな文章で綴られた手紙から、ぼくとぼくの家族が今後の人生の多くの時間を過ごそうとしている成城の、良い面悪い面、余すところなくその輪郭が見えてくる。横塚先生のその手紙で、ぼくたちは成城に来る以前から、すっかり「成城家族」になってしまっていた。

時の過ぎゆくのは誰にも止めようがなく、昨春その娘も成城学園高校を卒業し、自分の人生を模索している。そしてこの春、横塚先生も40年間勤めた成城大学を退職されることになった。「〇〇教授最終講義」などと、看板を掲げての物々しさは、もちろん先生の性に合わない。ヨーロッパ文化学科1年生の必修科目である総合講座「ヨーロッパの文化」の今年度最後の時間を、横塚先生にお願いすることになった。

例の「ヨコツカです……」から始まって、しばらくは言わずもがなの「言い訳」が続く。B4版両面印刷1枚のレジユメとはいえ、普通紙にして8枚もあるから、90分の講義でこんなに盛りだくさんの内容が消化できるのかと、いささか心配にもなってくる。しかし、そこは教歴40年の大ベテランのこと、結果から言うと、過不足なくそれだけの分量をこなしたばかりか、まだ90分の講義に慣れきっていない「一年坊主」たちを、飽きさせることなく、最後まで引っ張っていく。ぼくは末席でこの講義を聴いていたから、教室の様子は一目瞭然、普通なら退屈して居眠りしている学生が、この日に限って1人も見当たらない。

さて、講義のテーマは Memento Mori と Carpe Diem、すなわち「死を忘れるな」と「この日を楽しめ」である。自らがカトリックの信者であり、

ドイツのカトリック文学を専門に研究されてこられた横塚先生の行きついた先は、バロック時代だった。内にあってはペストの災禍、外にあっては異教徒トルコ人の恐怖、それらの厄災から人々を守るべきカトリックの墮落と、その反動としての宗教改革……宗教改革をルネッサンスと一緒にして、中世の闇から近代の理性の光へのステップであった、などと高校の世界史で習った遠い記憶があるが、この時代はもちろん、そんな生易しいものではない。昨今のわが国の「痛みを伴う改革」などとは違って、ルターやカルヴァンらの宗教改革は血腥い宗教戦争を引き起こし、翌17世紀には、ドイツを荒廃させた三十年戦争勃発の原因となる。横塚先生のレジュメには、宗教改革者ルターの「子どもの歌」という詩が引用されているが、その題名から推測される優しさとは正反対、「教皇とトルコに死をもたらせ給え」などと、過激きわまりない。

この時代のヨーロッパには、至るところに「死」があった。「死」は、生きる者なら誰でも一度は経験しなくてはならないことだが、その経験を生きて語り合うことができないから、「死」は生者にとって不可避ではあるが抽象的な概念でしかない。しかしドイツ語の *der Tod* は、その抽象的な「死」であるとともに、その「死」が具象化された「死神」をも意味する。髑髏の顔をして、長い鎌を持ったあの真っ黒な姿だ。

アンドレーアス・グリューフイウスの名前はドイツ文学を学んだ者なら誰でも知っているが、ここであらためて、この詩人が三十年戦争の間に誕生し成人したことを教えられる。横塚先生は「試訳」などと謙遜されているが、「すべては 是かない」という詩は、わが国の古典で「無常」を教えられてきたわれわれの胸を打つ。「どこをみようと、この世のはかなさのみ、/今日誰かが建てたものを 明日には誰かが壊す」「永遠なるものは何もない」「偉

大な業の栄耀も 夢のように消え失せる。」

グリューフイウスはもちろん、三十年戦争で荒れ果てた故郷のことを謳っているのだが、横塚先生は、学生の記憶にあるはずのニューヨーク貿易センタービルを引き合いに出して注意を喚起する。横塚先生の年代なら、焼け野原と化した東京が、陰の裏に焼き付いているだろうけれど。

次に、アンゲルス・ジレージウスが紹介される。こちらは、岩波文庫の『冥想詩集』からの引用だが、「すべてこの世のものは煙である」という詩句から、この世の事物に固執することの空しさを切々と、横塚先生は説かれたが、そこから立ち上ってくるのは、すべての事物がはかなく消える煙のように虚しいという地上の真理を超えた、永遠不変なるものへの憧れである。これこそ、地上の真理に対して天上の真理といえるのではないだろうか。このあたりから、横塚先生の言わんとするところが、少しずつ明らかになってくる。

間奏曲として、ハンス・ホルバインの『死の舞踏』の図像から、「皇帝」と「伯爵夫人」と「幼子」と「死の紋章」が示される。正義の剣を手に持った皇帝マクシミリアン一世の裁きの瞬間においてさえ、「死」は皇帝の冠に手を伸ばしている。「死」に手を引かれて連れ去られようとしている幼子には、もうなんの説明もいらない。

この世の存在のはかなさを嘆いたグリューフイウスとジレージウスより少し前に生まれたマルティン・オーピッツは、「死を忘れるな」とはちょうど逆のカルペ・ディエム、すなわち「この日を楽しめ」という詩を書いている。版によっては「この日を楽しめ」という題が付けられていないそうだが、この詩が書かれたのも三十年戦争のさなかのことである。同じ時代に、どうしてこんなに楽しげな詩が書かれたのだろうか。

若者よ、プラトンなんぞ読んでいないで、自然の中へ出かけてみなさい、そこには、清らかな泉があり、美しい花々が咲き乱れ、そして美酒があり、果実やお菓子があ、さらには心躍らせる音楽がある……「すべては空しい」のとは大違いだ。

しかし、横塚先生は、この一見陽気な詩に織り込まれた、「誰もが土に帰るのだ」とか「運命の女神クロト」とか「もうすぐ1人で死んでいくとしても」とかいった詩句を見逃さない。この詩に描かれた自然の中の「生の小川」の流れは人生の時間の流れなのであると説明したうえで、享樂へと向かう気分の根底にある空しさと孤独が、見事に描き出される。「メメント・モーリ」と「カルペ・ディエム」、この一見矛盾対立する人生観は、実のところ根底では同じなのである。すべてははかなく空しいからこそ、今のこの瞬間を楽しめ、しかし、それがこれからもずっと続くのではないことを、いつも肝に銘じていよ、そうすることでまた、この瞬間の喜びも大きくなる。この世のすべてが空しいからこそ、永遠なるものへの切ない憧れを心に抱いて、今日のこの瞬間を生きて楽しむのだ。「いのち短し、恋せよ乙女」……横塚先生の口から、おそらく今の若者は聞いたこともないであろうこの歌が漏れ出たのも、偶然ではあるまい。

最終講義において、決して熱弁を奮うのではなく、かといって蚊の泣くような声でもなく、透き通った張りのある落ち着いた話しぶり、永遠なるものへの憧れを淡々と語る横塚先生の、若者へのこの貴重なメッセージは、1年生だけではなく全学生、とりわけ、まもなくこの大学を卒業していく4年生にも聴かせたかった。